

酒匂川流域における環境保全と今後の展望

Progress of basinwide environmental conservation movement along the Sakawa River, Kanagawa

地理環境学コース 沖田 ちづる Chiduru OKITA

最近では、流域環境を視点とした活動が進められ、市民・企業・関係自治体・河川管理者がパートナーとして連携し、具体的に行動することが求められてきている。本研究で対象とする酒匂川とは、かつてから暴れ川と呼ばれる川であり、人々は常に災害と戦ってきたが、現在酒匂川をとりまく地域の動向としては、「酒匂連携軸総合整備構想」といった都市づくりや上流域（鮎沢川）である静岡県と中～下流域（酒匂川）である神奈川県が共同とする流域環境保全活動が行われている。

本研究では、酒匂川流域における災害状況を整理し、環境保全のあり方について検討を試みた。流域環境保全を考えるにあたっては、より総合的な視点に立って進めていくことが望ましく、本研究では、地理学的手法を踏まえながら進めていくことにした。

河川と地域の関わりを把握するため、保全事業の変遷を辿ったところ、特に酒匂川右岸の堤防は特徴的な霞堤であり、現在では河川環境の整備が積極的に進められており、治水・利水機能に加えて自然環境に配慮することを目的としている。酒匂川の河川敷は、レクリエーション施設等として利用されている。確かに人々が楽しく活動できる場として使われており、地域住民にとっては憩いの場として親しまれていると思われる。しかし、その一方で、霞堤（堤防）とは、酒匂川流域の防災と深く関わってきたものであるという治水の面での認識が薄れ、むしろ利用するという視点へ向かっている傾向にある。酒匂川特有の危険性を、地域住民は心得ておく必要があると考えられる。

社会の流れに伴い、河川と地域がどのように変わってきたか、酒匂川流域の変遷を辿ってきたところ、近年の特徴としては多自然型の河川改修が広く行われ、河川の自然環境としての価値が見直されている。生態系に優しく配慮していくという視点と人々が安全に住めるように水害を軽減していくという視点の両者を調整していくことが重要である。

河川をとりまく地域と人々の取り組みとして流域保全があげられ、流域環境を視点とした活動が

酒匂川流域でも進められている。そこで、酒匂川流域における環境保全のあり方を検討するために、流域環境保全活動の実態調査を行なったところ、1) 水質保全を目的とする「酒匂川水系保全協議会」、2) 交通の利便性を主題とする「酒匂川交流ネットワーク会議」、3) 地域住民が主体となり、ネットワーク形成をはかっている「酒匂川流域グリーンフォーラム～酒匂川流域の水源を守る地域連絡協議会～」、4) 生態系への保全に視点を置いている「酒匂川水系のメダカと生息地を守る会」・「開成町ホテルの里づくり研究会」という4つに細分化されており、現状としては、各々の活動がすべて一体となってパートナーシップをはかることが困難であった。

今後の課題としては、各々の保全活動が意見交換できる場を設けて、総合的に流域環境をとらえていくことが重要とされる。現在の酒匂川流域は、防災と親水をかねそなえた保全活動は、まだ活発化しておらず、これからは、酒匂川流域のような二級河川でも、災害に対応したハザードマップを作成し、地域住民・関係自治体・河川管理者が一体となった防災面が必要であり、流域環境保全活動に防災が加えられるべきだと考えられる。

公刊論文：

沖田ちづる 2004. 酒匂川流域の環境保全活動. 水利科学, 275, 38-56.